

児童養護施設における「問題行動」への対応に関する研究 児童養護施設職員が対応困難であると感じる入所児童の行動について

著者	佐藤 ちひろ
著者別名	Chihiro SATO
雑誌名	東洋大学人間科学総合研究所紀要
巻	21
ページ	153-165
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010908/

児童養護施設における「問題行動」への対応に関する研究 —児童養護施設職員が対応困難であると 感じる入所児童の行動について—

佐藤 ちひろ*

1 はじめに

児童相談所における児童虐待相談対応件数は毎年増加しており、2016（平成28）年度の虐待対応件数は122,575件となり過去最多である。また死亡事例も同様に増加しており、2017（平成29）年8月の第13次報告では72例84人となっており、そのうち0歳児が4割強となっている。児童虐待の増加に比例して要保護児童も増加している。

要保護児童に対して児童福祉法には、「保護者のない児童、被虐待児等家庭環境上養護を必要とする児童等に対し、公的な責任として、社会的に養護を行う」ことが明記されている。社会的養護は施設養護と家庭養護に大別される。施設養護の中で児童養護施設は「保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童」が入所している。施設数は615か所であり、定員は32,605人、現員は26,449人である（2016（平成28）年現在）。要保護児童増加の中、より家庭に近い環境での養護を行う家庭的養護の推進がなされ、施設の小規模化がすすめられている。しかしながら、児童養護施設の5割以上が1舎あたりの定員が20名以上の大舎制であるのが現状である。日本の社会福祉において「地域支援」が叫ばれる昨今、児童福祉分野においてははまだ施設福祉が主流であるといわざるを得ない。

児童養護施設の現状として、「児童養護施設入所児童等調査」によると入所児童の約6割が「虐待」を理由に入所し、また約3割弱の入所児童に何らかの障がいがあることが明らかになっている。入所児童の「虐待」を受けたことによって引き起こされる行動や「障がい」が引き起こす行動などが時として「問題行動」となって表出する。「虐待」や「障がい」などによる「問題行動」を起こす児童に対しては、心理療法担当職員が配置され対応にあたっているが、それでも日常生活で児童の生活支援や児童指導員や保育士が対応することが多い。日常生活の中で入所児童の「問題行動」が起きたとき、その支援の現状とあり方について考察していきたい。

入所児童の「問題行動」への支援について考察するにあたり、筆者はチームケアが重要であると考

* 人間科学総合研究所客員研究員

えている。社会的養護は近年になり、より家庭的な養護であることが求められている。しかしながら、児童指導員一人ひとりの負担は大きく、それは勤務時間にもあらわれる。児童一人ひとりを継続して支援することは必要であり重要だが、一人の職員が児童のすべてを丸抱えすることはできない。交代制勤務は家庭的養護と相反するようにとらえられてしまうこともある。しかしながら、施設養護において交代制勤務の形態を取りながらもチームケアを行うことで、職員一人ひとりの負担軽減につながり、それは児童へのよりよい支援につながっていくのではないかと筆者は仮定する。

児童養護施設の児童の「問題行動」に関する研究は、心理学の分野に見られるが(石, 2006)(宇賀神, 山崎, 金崎, 2007)、いずれも問題行動へのアセスメントの重要性を指摘するものである。本研究では福祉的な視点から、「問題行動」にチームで対応する重要性について言及したい。

研究方法として、まず①児童養護施設職員が感じる「問題行動」とは具体的に何を指すのか、というのを明らかにする。次に②日常的な支援を行っている児童指導員や保育士が「問題行動」に対してどのような対応しているのかを明らかにする。さらに③児童養護施設職員のチームケアが機能し、問題行動の対応に活かされているのかについて明らかにする。そして④「施設」での支援の基本であるチームケアで対応するにはどのようにしたらいいのか、チームケアに自覚的に取り組んでいる施設からその必要性と重要性を明らかにしていく。

本論においては、研究の①である「児童養護施設職員が感じる『問題行動』とは具体的に何を指すのか」ということについて報告していく。

2 「問題行動」とは何か

そもそも「問題行動」とは何を指しているのか。「問題」とは、大辞泉によると「批判・論争・研究などの対象となる事柄。解決すべき事柄。課題。」「困った事柄。厄介な事件。」とある。また、「取り上げて討論・研究してみる必要がある事柄。解決を要する事項。」「取り扱いや処理をせまられている事柄。」とも書かれている。困ったことや解決を要する事柄を指していることがわかる。

毎年度実施されている文部科学省による「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」において「問題行動」とは「小学校、中学校及び高等学校における暴力行為」、「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校におけるいじめ」、「公立の小学校及び中学校における出席停止」、「小学校及び中学校における不登校」、「高等学校における長期欠席」、「高等学校における中途退学者」、「小学校、中学校及び高等学校における自殺」と定義され、調査されている。

では、児童養護施設における「問題行動」とは何を指しているのか。児童養護施設における施設内暴力について「安全委員会」方式を提案し取り組んでいる田嶋(2013)によると、施設には「2レベル3種の暴力(含性暴力)」があるとしている。2レベルとは潜在的暴力と顕在的暴力であり、3種の暴力とは、①職員から入所児童への暴力(職員暴力)、②子ども間暴力(児童間暴力)、③子どもから職員への暴力、の3つである。これらを「問題行動」としている。職員から児童への暴力については、厚生労働省の「被措置児童等虐待届出制度の実施状況」において、調査がなされている。また、

子ども間暴力については、高橋らが「79.6%の職員が、暴力を含めた児童間の権利侵害など、子ども同士の権利侵害に対して対応に苦慮したことがある」と述べている。児童から職員への暴力については、東京都社会福祉協議会児童部会によると「61.9%の職員が、身体的暴力、器物破損、凶器による脅し、言葉による脅しなどの児童による暴力を受けた」としている。

堤、高橋、西澤、原田（1997）や西澤（1998）は、児童養護施設に入所している子どもを対象に、虐待体験と処遇困難という問題の関連性についての調査を行った。そして、「逸脱的行動化傾向」「暴力的行動化傾向」「意欲喪失」「親密な人間関係の障害」「自己中心的傾向」「身体症状化傾向」「不安に基づく偽成熟性」の存在を明らかにした。

また、伊東らや山本らの研究によると、児童養護施設の被虐待児の問題行動として、他児への威圧行為や暴力行為、気分変動の激しさ、学力不振、注意・多動の問題などがあげられている。

さらに、鈴木、佐藤、秋元、金、木下の児童養護施設における児童の問題行動と保護者の抱える問題に関する実証的研究では、家出、盗み、怠学、不良交遊、家庭内暴力、性的非行、金品持ちだし、喫煙、シンナー、放火、火遊び、不登校、寡黙、自律神経失調症、弱いものいじめ、いじめられる、人にお金をせびる、嘘を言う・食事をこう・同情をひく、夜尿・失禁、神経症の習癖症状、低学力ボーダー、その他を入退園時の児童の問題行動として調査を行っている。

3 CBCL について

子どもの問題行動を図る指標として、代表的なものにCBCL（子どもの行動チェックリスト）やSDQ（子どもの強さと困難さアンケート）といったものがある。

CBCLは、家庭での子どもの様子を良く知っている、親あるいはそれにかわる養育者が記入するものである。結果は、問題行動尺度として得点化され、8つの下位尺度（ひきこもり、身体的訴え、不安抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、攻撃的行動と非行的行動）と2つの上位尺度（内向尺度、外向尺度）から構成される。教育・医療現場でのスクリーニングや診断プロセスなどに活用される。

SDQ（Strengths and Difficulties Questionnaire）はおよそ3歳から16歳くらいまでの子どもについての、多側面における行動上の問題に関するスクリーニング尺度である。日本では「子どもの強さと困難さアンケート」と訳され、子育てSDQともいう。イギリスを中心にドイツや北欧などのヨーロッパ諸国で広く用いられており、自閉症スペクトラム障害や注意欠陥多動性障害、行為障害などの測定について信頼性が高く評価されている。日本で子どもの行動評価法として定着している「子どもの行動チェックリスト（CBCL）」よりも質問の数が少なく、総合的な支援の必要性を簡便に測ることができる。とされている。

これらのような子どもの行動指標のリスト化されたものの中から、本研究ではCBCLの指標に基づいて調査項目の設定を行った。SDQはメリットとされている評価項目の少なさがあるが、実際の行動は多様であり、調査を行うにあたっては様々な行動を網羅しているCBCLの項目を選択するこ

とした。CBCLを用いた児童福祉施設への調査については、大原ら(2008)の研究があり、「非行的行動」や「攻撃的行動」の高さについての指摘がある。

CBCLについては、元々、米国、バーモント大学のThomas Achenbachらが1960年代後半から実証研究をもとに、人の精神状態と行動を多角的に評価するチェックリストを開発してきた(Achenbach System of Empirically Based Assessment:実証に基づくAchenbachの評価システム(ASEBA))。ASEBAによれば、現在は90言語以上に翻訳されて使用されているが、世界各国の幼児から高齢者までを対象に、それぞれのライフステージごとに、自己評価、他者評価、教師評価など記入者ごとのバージョンに分けて用いられている。

日本では、1991年版をもとに、中田ら(1999)による幼児用CBCL(Child Behavior Checklist)/2-3、倉本ら(1999)による青年用YSR(Youth Self-Report for Ages)/11-18、井瀬ら(2001)の子ども用CBCL/4-18の日本版が開発され、特にCBCLはさまざまな場面で利用されていた。一方、ASEBAでは、2001年までには、子どもの年齢層を就学前と就学後に分けて見直し、幼児用CBCLをそれまでの2-3歳児から1.5歳から5歳の就学前期にまで広げ、子ども用CBCLは、6-18歳の学齢児を対象として、行為と注意の問題および抑うつ等の測定を改善するため、項目を置き換え(Achenbach and Rescorla, 2001)、尺度名の一部変更や、臨床域、ボーダーライン域および正常域のカットオフ値も変更を加えて(Achenbach and Rescorla, 2001)、幼児用CBCL(Child Behavior Checklist)/11/2-5と保育士用のC-TRF(Caregiver-Teacher Report Form)(Achenbach and Rescorla, 2000)、学齢児保護者記入用CBCL/6-18と青年期自己記入用YSRおよび教師用TRF(Teacher's Report Form)への改訂が行なわれている(Achenbach and Rescorla, 2001)。

本研究では、調査対象が児童養護施設職員であり、質問紙の内容が学齢期児童であるということを踏まえて、学齢期の保護者記入用CBCL/6-18を使用している。

4 調査概要

(1) 調査の目的

本研究は、児童養護施設における入所児童の「問題行動」に焦点を当て、その対応方法について考察していくものであり、児童養護施設職員が入所児童のどのような行動に困難さを感じ、その行動に対する対応方法を明らかにするための基礎調査である。

調査にあたっては、清和大学短期大学部の研究委員による倫理委員会に提出し承認を得た。

(2) 調査対象と調査方法

全国児童養護施設協議会に登録している児童養護施設601か所(2014(平成26年)10月時点)を対象に、調査票(自記式・無記名方式)を用いた郵送調査を実施した。厚生労働省の社会福祉施設等調査によると職員数16,672人であり、職員数には、施設長、児童指導員、保育士、医師、セラピスト、保健師・看護師、栄養士、調理員、事務員、その他が含まれているため、回答は「児童と直接関わる職員(児童指導員、保育士、施設長等)とした。該当する職員が施設ごとに何名勤務しているか

不明のため、各施設に30部の調査票を送付した。調査時期は2016（平成28）年8月1日から2016（平成28）年9月30日までとした。回収数は2,598件であった。

調査項目は「職種」「性別」「年齢」「勤務年数」「一人では対応が困難であると感じる行動」「問題行動へ対応する体制」「対応に難しさを感じる児童」についてである。「一人では対応が困難であると感じる行動」については、CBCLの子どもの行動チェックリストに基に作成した109項目にわたる質問がなされている。特定の児童ではなく、「学童期の児童」全般を想定して回答を行ってもらった。「とても困難」=1、「やや困難」=2、「あまり困難ではない」=3、「困難ではない」=4の4件法で回答された。

(3) 分析方法

調査票作成の際、8名の児童養護施設職員（施設長、児童指導員、保育士）に対してプレ調査を実施した。その調査の中で、対応困難な子どもの行動尺度109項目について得点分布を確認したところ、いくつかの質問項目で得点分布の偏りが見られた。しかしながら、得点分布の偏りが見られた項目の内容を吟味したところ、いずれの質問項目についても、対応困難な子どもの行動尺度という概念を測定する上で不可欠なものであると考えられた。そこでここでは項目を除外せず、すべての質問項目を以降の分析対象とした。

CBCLにおいて問題行動質問は、「不安／抑うつ」、「引きこもり／抑うつ」、「身体愁訴」、「社会性の問題」、「思考の問題」、「注意の問題」、「規則違反的行動」、「攻撃的行動」の8つの症状群尺度に、さらに、上位尺度として、「不安／抑うつ」、「引きこもり／抑うつ」、「身体愁訴」を内向尺度に、「規則違反的行動」と「攻撃的行動」を外向尺度にすでに分類、設定されている。そのため、CBCLが設定した尺度を使用することとした。

(4) 結果

本論文では、児童養護施設職員が感じる「一人では対応が困難である」児童の行動について把握することが目的である。

まず、CBCLに基づいて設定した子どもの行動チェックリスト109項目それぞれについて、平均値を求めた。回答は「とても困難」=1、「やや困難」=2、「あまり困難ではない」=3、「困難ではない」=4の4件法となっている。

全体の結果として、「一人では対応が困難である」と感じる児童の行動については、「性的な問題」が最も「困難=1」に近く（1.46）、次いで「放火する」（1.48）「人に暴力をふるう」（1.55）「家の外で盗みをする」（1.56）と続いている。（表1から表8）

一方で、対応が「困難ではない=4」に近いものは、「他人といるより一人でのを好む」（3.11）や「運動神経が鈍くて不器用」（3.10）、「内気、臆病」（3.09）といった項目となっている。

CBCLが設定した8つの症状群尺度である「不安／抑うつ」、「引きこもり／抑うつ」、「身体愁訴」、「社会性の問題」、「思考の問題」、「注意の問題」、「規則違反的行動」、「攻撃的行動」ごとの平均値を求めた結果が以下となっている。

不安／抑うつ (表1)	度数		平均値
	有効	欠損値	
よく泣く	2576	22	2.77
特定の動物、特定の状況や場所を怖がる	2559	39	2.69
学校に行くのを怖がる	2560	38	2.30
悪いことを考えたり、したりするかもしれないと心配する	2560	38	2.54
完璧でなければいけないと思う	2567	31	2.66
誰も大切に思ってくれないと感じたり、こぼしたりする	2571	27	2.44
自分には価値がないか、劣っているように感じる	2567	31	2.44
神経質あるいは緊張している	2565	33	2.79
極端に怖がりあるいは心配性である	2565	33	2.65
自分が悪いと思いつ過ぎる	2569	29	2.55
人目を気にし、すぐに恥ずかしくなる	2539	59	2.88
自殺のことについて話す	2542	56	2.03
心配する	2531	67	2.88

「不安／抑うつ」についてはすべての項目について平均的（「やや困難=2」「あまり困難ではない=3」）となっている。

引きこもり／抑うつ (表2)	度数		平均値
	有効	欠損値	
他人といるより一人でのを好む	2575	23	3.11
絶対にしゃべろうとしない	2541	57	2.12
人に打ち明けないで秘密にする	2543	55	2.32
内気、臆病	2546	52	3.09
活動的でなく、動作がのろく、元気がない	2538	60	2.77
楽しくなく、悲しく、落ち込んでいる	2536	62	2.59
引きこもって他人と関わりを持とうとしない	2537	61	2.22

「引きこもり／抑うつ」については、「他人といるより一人でのを好む」や「内気、臆病」といった項目が「あまり困難ではない=3」よりになっており、対応に困難さを感じる項目は見られなかった。

身体愁訴 (表3)	度数		平均値
	有効	欠損値	
怖い夢をみる	2567	31	2.83
めまいを感じる	2558	40	2.61
疲れ過ぎている	2542	56	2.85
医学的な原因がみつからない身体的な問題	2527	71	1.91

「身体愁訴」については、「医学的な原因がみつからない身体的な問題」(1.91)が2.0以下で困難

に感じるものとしてあげられる。この「医学的な原因が見つからない身体的な問題」は、からだの痛みや頭痛、吐き気、気分が悪い、眼の問題、発疹や皮膚の問題、腹痛や胃けいれん、吐く、もどすといった身体的な問題をさしている。

社会性の問題（表4）	度数		平均値
	有効	欠損値	
大人にまとわりつく、または頼りにし過ぎている	2581	17	2.50
ひとりぼっちで寂しいとこぼす	2571	27	2.89
他の子と仲よくできない	2572	26	2.30
すぐに嫉妬する	2573	25	2.56
他人にねらわれていると感じる	2555	43	2.45
よくケガをし、事故にあいやすい	2572	26	2.19
よくからかわれる	2570	28	2.54
他の子から好かれていない	2573	25	2.58
運動神経が鈍くて不器用	2544	54	3.10
年下の子といっしょにいるのを好む	2544	54	3.01
しゃべり方の問題	2539	59	2.72

「社会性の問題」については、「困難ではない=4」に近い回答が多く、特に「運動神経が鈍くて不器用」や「年下の子といっしょにいるのを好む」といった項目は、一人でも対応困難ではない項目としてあがっている。

思考の問題（表5）	度数		平均値
	有効	欠損値	
ある考えをふりはらうことができない（強迫観念）	2572	26	2.12
わざと自分を傷つけたり、死のうとしたりする	2572	26	1.64
存在しない音や声がきこえる	2562	36	2.21
体がひきつったりピクピク動いたりする	2564	34	2.65
皮膚や体の他の部分をつついたりほじくったりする	2539	59	2.16
人前で自分の性器をいじる	2546	52	1.89
自分の性器をいじり過ぎる	2535	63	2.01
ある行為を何度も繰り返す（強迫行為）	2537	61	2.00
存在しないものがみえる	2532	66	2.25
たいていの子より睡眠時間が短い	2544	54	2.85
不必要な物をためこむ	2541	57	2.51
変な行動	2519	79	2.27
変な考え	2521	77	2.31
寝ている時に話したり歩いたりする	2537	61	2.27
睡眠の問題	2531	67	2.56

「思考の問題」については、「わざと自分を傷つけたり、死のうとしたりする」や「人前で自分の性器をいじる」といった項目が「困難=1」に近い平均値となっている。

注意の問題 (表6)	度数		平均値
	有効	欠損値	
行動が年齢より幼すぎる	2577	21	2.69
集中力や注意力が長続きしない	2582	16	2.25
じっとすわってられない、落ち着きがない、または多動	2581	17	2.10
混乱したり、訳がわからなくなっているように見える	2565	33	2.23
空想したり、考えにふけったりする	2572	26	2.97
衝動的だったり、じっくり考えないで行動する	2579	19	2.09
学校の成績が悪い	2549	49	2.68
ぼかんと一点をみつめる	2538	60	2.91

「注意の問題」については、すべての項目で偏りは見られない。

規則違反的行動 (表7)	度数		平均値
	有効	欠損値	
やってはいけない事をした後でも悪いとは思わないようだ	2580	18	1.81
悪い事をする子達とたむろする	2571	27	2.02
嘘をついたり、だましたりする	2572	26	2.16
年上の子といっしょにいるのを好む	2549	49	3.04
家出をする	2542	56	1.67
放火する	2541	57	1.48
性的な問題	2546	52	1.46
家の中で盗みをする	2549	49	1.81
家の外で盗みをする	2542	56	1.56
ののしったり、卑わいな言葉を使う	2546	52	2.15
セックスのことを考え過ぎる	2539	59	2.13
人をよくからかう	2543	55	2.51
酒を飲んだり、病気のためでなく薬を使っている	2530	68	1.67
器物破壊	2543	55	1.66

「規則違反的行動」の項目は、「年上の子といっしょにいるのを好む」以外は、「困難=1」によつた平均値となっている。多くの回答が「困難」もしくは「やや困難」であると回答している項目が多くなっている。

攻撃的行動 (表8)	度数		平均値
	有効	欠損値	
よく言い争いをする	2583	15	2.45
他人に残酷で、いじめたり、いじわるしたりする	2575	23	1.77
たくさんの注目を引きたがる	2577	21	2.42
自分の持ち物を壊す	2573	25	2.44
家族や他人の持ち物を壊す	2575	23	1.98

家でいうことをきかない	2569	29	2.29
学校でいうことをきかない	2576	22	2.12
よくつかみあいのケンカをする	2574	24	2.03
人に暴力をふるう	2547	51	1.55
よくわめく	2547	51	2.02
頑固、不機嫌、イライラ	2545	53	2.22
気分や感情が突然変わる	2550	48	2.07
よくすねる	2549	49	2.57
疑り深い	2541	57	2.62
人をよくからかう	2543	55	2.51
人をおどす	2538	60	1.88
普段より騒々しい	2535	63	2.57

「攻撃的行動」についても、「困難=1」によった平均値となっている。多くの回答が「困難」もしくは「やや困難」であると回答している項目が多くなっている。

その他の問題（表9）	度数		平均値
	有効	欠損値	
トイレ以外で大便をする	2562	36	2.40
自慢したり、うそぶいたりする	2579	19	2.70
動物を虐待する	2557	41	1.95
ちゃんとした食事をしていない	2563	35	2.44
爪をかむ	2569	29	3.06
食べ過ぎる	2574	24	2.77
太り過ぎている	2538	60	2.78
目立ちたがり屋でおどけたりする	2549	49	3.03
昼寝も含めて、たいていの子より睡眠時間が長い	2537	61	3.02
しゃべり過ぎる	2542	56	2.87
指しゃぶり	2543	55	3.01
日中おもらしをする	2541	57	2.57
おねしょをする	2545	53	2.88
めそめそ泣き言をいう	2540	58	2.99
男（女）子だが女（男）になりたがる	2531	67	2.60

「その他の問題」では、「動物を虐待する」という項目が「困難=1」によった平均値となっている。

平均値が低く、対応が「困難」であると考えられる項目が多くみられたのは、「規則違反的行動」と「攻撃的行動」であった。CBCLでは、「不安／抑うつ」、「引きこもり／抑うつ」、「身体愁訴」を内向尺度、「規則違反的行動」と「攻撃的行動」を外向尺度と設定しており、この外向尺度のものと言える。職員は内向的な問題行動より、外向的な問題行動において「一人では対応が困難」であると感じている。

なお欠損値については、質問項目の後半に多く見られる。109項目に対して4件法で回答するという方法が、回答者に負担を与えこのような結果につながったと考えられる。

5 考察

児童養護施設における入所児童の「問題行動」の中でも、職員が「一人では対応が困難」な行動とは何かということについては以下のような結果が調査から明らかになった。まずは、「性的な問題」「人前で自分の性器をいじる」などといった性的なもの、「放火する」「家の外で盗みをする」「家の中で盗みをする」などといった非行、触法のもの、「人に暴力をふるう」「家族や他人の持ち物を壊す」「人をおどす」「器物破壊」「動物を虐待する」「他人に残酷で、いじめたり、いじわるしたりする」といった攻撃性のもの、「酒を飲んだり、病気のためでなく薬を使っている」「わざと自分を傷つけたり、死のうとしたりする」「医学的な原因が見つからない身体的な問題」「家出をする」といった項目があげられた。

調査から、平均値が2以下である項目をピックアップすると、8つの症状群尺度の「規則違反的行動」と「攻撃的行動」にそのほとんどがあることがわかる。表7を見ると、「規則違反的行動」においては、「性的な問題」「放火する」「家の外で盗みをする」「器物破壊」「酒を飲んだり、病気のためでなく薬を使っている」「家出をする」「家の中で盗みをする」「やってはいけない事をした後でも悪いとは思わないようだ」という項目が「困難」「やや困難」であるという回答が多い平均値2以下となっている。また、「攻撃的行動」においては、表8を見ると、「人に暴力をふるう」「他人に残酷で、いじめたり、いじわるしたりする」「人をおどす」「家族や他人の持ち物を壊す」といった項目が平均値が2以下となっている。

「規則違反的行動」と「攻撃的行動」はCBCLにおける外向尺度にあたるのは前述の通りである。つまり、児童養護施設職員が「一人では対応が困難」な行動の多くは項目が、CBCLのこの外向尺度に当たることが明らかになった。外向尺度とは、外に向けられた(問題)行動である。入所児童個人の内面的な問題、つまりCBCLにおける内向尺度である「不安/抑うつ」、「引きこもり/抑うつ」、「身体愁訴」については、対応に難しさを感じることは少なく、外に向けられた行動に対して困難を感じていることである。外に向けられるものは、時に他者に、または職員自身を攻撃したり傷つけたりする行動である。「逸脱行動」として位置づけられる「規則違反的行動」と「攻撃的行動」は学童期から対応に苦慮しているという今回の結果で明らかになった。他者などを巻き込んだ行為に対しては、職員が一人で対応することが難しく、施設内や関係機関と連携して対応に当たる必要がでてくる。

では、これらの行動に対して、職員はどのように対応しているのかということについては、別途論じることとしたい。児童本人だけでなく他者が関係してくるような問題行動については、職員一人の対応で終了することは少なく、施設内外での情報共有や連携が必然となってくる。その際に重要なチームでの対応やケアについて今後考察を行っていきたい。

本稿の目的は、児童養護施設職員が一人では対応が困難だと感じる児童の行動について明らかにすることであり、それに対する対応についてまでは言及することができなかった。そのため、今後はさらに項目ごとの相関関係、職種や経験年数による比較等行って分析をすすめていきたい。質問紙調査では自由記述形式であるが、対応困難な行動への対応体制についても質問している。また児童養護施設職員へのインタビュー調査も実施しており、その中でも実際の対応体制などについても聞いている。それらをまとめて、チーム対応の重要性について言及していくことが今後の課題である。

謝辞

本研究は、科学研究費助成事業（若手研究B）の助成を受けたものです（25786303）。また、質問紙調査やインタビュー調査において、多くの方々にご協力いただきましたこと、深謝致します。

引用・参考文献

- 伊東ゆたか・犬塚峰子・野津いなみ・西澤康子「児童養護施設で生活する被虐待児に関する研究（2）」『子どもの虐待とネグレクト』5(2)、2003
- 山本知加・尾崎仁美・沼谷直子ら「虐待を受けた子どもの行動チェックリスト（ACBL-R）の標準化の試み」『子どもの虐待とネグレクト』10(2)、2008
- 小野さやか・中野明徳「児童養護施設入所児童の問題行動についての考察—職員の共感疲労・バーンアウトとの関連—」『別府大学臨床心理研究』12(13)、2017
- 鈴木幸雄・佐藤秀紀・秋元洋志・金潔・木下茂幸「児童養護施設における児童の問題行動と保護者の抱える問題に関する実証的研究」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』9、2002
- 大原天青・楡木満生「児童自立支援施設入所児童の行動特徴と被虐待経験の関係」『発達心理学研究』19(4)、2008
- 大久保牧子・山本恒雄「問題行動により、不適応を起こした児童の支援」『日本子ども家庭総合研究所紀要』50、李明憲・坪井裕子「Youth Self Report（YSR）による被虐待児の情緒・問題行動の特徴—児童養護施設児を対象とした検討—」『乳幼児医学・心理学研究』12(1)、2003
- 吉里肇・吉川久史・市井雅哉・砂川恵正「児童養護施設に入所中の子どもにおける問題行動とトラウマ反応に関する研究—CBCLとTSCCを用いて—」『発達心理臨床研究』13、2007
- 船曳康子・村井俊哉「ASEBA行動チェックリスト（CBCL：6-18歳用）標準値作成の試み」『児童青年精神医学とその近接領域』58(1)、2017
- 堤賢一・高橋利一・西澤哲・原田和幸「被虐待児調査研究—養護施設における子どもの入所以前の経験と施設での生活状況に関する調査研究—」『日本社会事業大学社会事業研究所年報』1997
- 西澤哲「虐待を受けた子どものケア児童養護施設が直面する課題」『季刊児童養護』29(2)、1998
- 高橋利一・西澤哲・原田和幸「養護施設における子どもの入所以前の経験と施設での生活状況に関する調査」『東京の養護』東京都社会福祉協議会、1996
- 田嶋誠一『児童福祉施設における暴力問題の理解と対応』金剛出版、2013
- 田嶋誠一『現実へ介入しつつ心に関わる—多面的援助アプローチと臨床の知恵—』金剛出版、2010

【付記】

本稿の執筆にあたり、査読の先生方から貴重なコメントと丁寧なご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。なお、本稿における誤りは全て筆者に帰するものです。

【Abstract】

Research on response to “problem behavior” in child care institution : Issues for staff of child care facilities

Chihiro SATO*

This study will focus on “problem behavior” observed in children that have been placed in foster homes and examine measures to address such behavior. Further, what “problem behavior” means to the facility workers is clarified. Particular focus is given to understanding the realities of how child instructors or nursery staffs, who provide daily support, handle this behavior, and whether those workers’ team care is functioning and sufficient for the measures. Furthermore, this study considers how to approach problem behavior through team care, which is fundamental for support at facilities, as well as team care’s necessity and importance at foster homes where it is practiced. In order to investigate the actual situations and measures towards “problem behavior”, the authors conducted quantitative research with workers at foster homes by means of a questionnaire to clarify how they view “problem behavior” and other issues. Further insight into the behavior, which workers identify as “difficult to handle alone”, was examined by applying the CBCL (Child Behavior Checklist) scales. The results showed that problem behavior best fits the items of “rule-breaking behavior” and “aggressive behavior” among CBCL Externalizing scales.

Key words : Child care facility, Problem behavior, Team care

本研究は、児童養護施設における入所児童の「問題行動」に焦点を当て、その対応方法について考察していくものである。児童養護施設職員が感じる「問題行動」とは具体的に何を指すのかということ、日常的な支援を行っている児童指導員や保育士が「問題行動」に対してどのような対応しているのか実態を把握し、さらに児童養護施設職員のチームケアが機能し、問題行動の対応に活かされているのかについて明らかにする。そして「施設」での支援の基本であるチームケアで対応するにはどのようにしたらいいのか、チームケアを自覚的に取り組んでいる施設からその必要性と重要性を考察することが目的である。

本論では、児童養護施設における児童の「問題行動」の実態とその対応を把握するため、児童養護施設職員へ質問紙による量的調査を実施した調査結果をもとに、児童養護施設職員は「問題行動」や対応が困難な行動をどのように捉えているのかということを明らかにした。

児童養護施設職員が感じる「一人では対応が困難」な行動については、CBCLの尺度に当てはめ考察を行った。その中で、CBCLの外向尺度である「規則違反的行動」と「攻撃的行動」の項目に当てはまることが明らかになった。

キーワード：児童養護施設、問題行動、チームケア

* A visiting research fellow of the Institute of Human Sciences at Toyo University